

情操陶冶と學習との關係

森 川 正 雄

(一) 情緒、情操の意義

幼兒保育上最も困難な事柄の一は幼兒の情操陶冶のこゝである。羞恥、恐怖、憤怒、嫌忌、反抗、疝癩等々が起つた時、如何様に之を處置すべきか、父母教師の何時も困惑する所である。情操を言へば今日普通には情緒が一定の事物に對して屢々惹起され、その事物を見れば直に或情緒を起す様に習慣的に成つてゐる時、此の習慣的傾向を情操と言ふことにして居る。例へば母を慕ひ、教師を敬ひ、友を親しみ、敵を憎むが如き場合、それが習慣的であれば情操といふのである。情緒も情操も同一語を用ひてゐる場合が多いから、唯恐怖、憤怒、愛情、同情など言はれても、一時的なのが、習慣的なのが能く調べて見ねば分らぬ事が少くない。

(二) 世間一般に行はれてゐる方法

さてその情緒、情操の取扱について普通世間で如何なる態度を取つて居るかと言ふに、第一には禁止命令『泣いてはいけぬ、泣くなく』、『蜻蛉の翅をむしつてはいかん、可愛相ではないか』。第二には説明『此の犬は噛み付きはしない、たゞ吠えるだけだ、逃げるに及ばぬ』。第三には模範『種痘など痛いこゝはない、そら此の通り、お母さんもしますよ。さあ、此度は坊や』。第四には賞罰或はその豫告『髪を刈るたびに駄々を言ふなぞ、いけません、お父さんに言ひますよ』。『靜に

おしつて言つたら、濟んだらキャラメル買つて上げるよ。第五には轉向「おもちゃの奪ひ合ひはいけません、壊れますよ、こちらにおよこし、あ、あれ御覽、チンドンヤが通るわ」。第六は根くらべ「まだ泣いて居るのか、幾らなご泣けく、目のつぶれるまで泣いて見ろ」等々、右のうちには有效なもの無効なもの、合理的なもの不合理なものが混在してゐる。

(三) 改良意見

幼児の生活を見るに、その生活が平日と異なる事がなければ、所謂平穩無事であり、何も恐れも怒りもするこゝちはない。併し、之に何か變つた事が起つて來るこゝ、始めて恐怖だの憤怒だのが起つて來る。故に情緒は新事情に接した時に生起するものだ云ふ事がわかる。幼少な子供ほゞ經驗に乏しいから、斯ういふ新事情に接した時、之に對應する經驗的方法を保持せて居ない。そこで専ら遺傳的方法によるの外ないのである。遺傳的方法と言へば即ち情緒もか本能もかに外ならぬ。例へば犬が來た、手か棒を振り上げるか、石を投げるかすれば犬はすぐ逃げるし、又知らぬ顔して通れば犬は何もしない事は經驗ある兒にはわかつて居る。それゆゑ犬を恐れるこゝちはない。併しさういふ事を知らぬ幼兒は遺傳的方法たる恐怖さいふ情緒も、逃走さいふ本能も起して此の新事情に對應するのである。尤も極幼少の兒は犬でも蛇でも毛蟲でも何でも恐れはしない。是は全く危險さいふ感じを未だ起さぬからである。盲目者蛇を恐れざるも同じである。

幼兒は少したつて新事物のうちには往々思ひもかけぬ苦痛あるこゝちを知つて、其後は新事情に對する毎に警戒心を生ずる様になる。事物に對する恐怖は此の段に起るのである(尤も或動物中には一定事物を、生れながら怖れるものもある)。幼稚園の幼兒が手技の時間なごに、色々やつて見ても、いつまでも自分だけ出來ぬこゝち知つて泣き出す事がある。是も持合せの經驗的方法では間に合はぬから、泣くさいふ遺傳的方法によつて教師の援助を求め、此の時間の新事情に對應するのである、大人の間にも同様の原理が行はれてゐる。親兄弟の臨終に當り、恢復に對する萬策盡きた時、皆が涕泣するのは即ち

それである。泣くさいふ事は經驗的方法の破産を意味してゐる。火事や地震さいふ様な變事に際して獨身の壯年者よりも幼兒を懐く婦人の方が恐れ騒ぐことの多いのも當然の理ミ言はねばならぬ。されば經驗的方法を多く獲得するほゞ遺傳的方法に訴へる事が少くなる譯である。經驗的方法の獲得は即ち學習の目的ミする所である。前述の實例について言へば、犬については始に小犬に食を與へさせなごして親ませる、理髮には機嫌よき時を選び、又壓迫苦痛を與へぬ様にし、蜻蜒は之を籠に入れて觀察させ、その生活の様を談らせ或は畫かせなごして放ちやり、玩具は争はぬ物を選ぶか、幾つも用意しておくさいふ様にすれば、決して悪い情緒を固定させる事がなく、玩具や動物や友達に對して好愛の情をもたせ、且、良い態度を取らせる事が出来る。

以上は唯、一方面の記述に過ぎぬが、幼兒の生活は悉く嚴然たる理法によつて支配せられて居る事が知り得られる。我は幼兒を吐り又宥める際に先づ能く幼兒行動の意義を検討し、經驗的方法を獲得せしめる様に努力せねばならぬ。